

博士学位論文審査要旨

2024年5月26日

論文題目： ヴィルヘルム期ドイツにおけるユダヤ体操運動（1898-1914年）
——身体ナショナリズム——

学位申請者： 河合 竜太

審査委員：

主査：	文学研究科	教授	服部 伸
副査：	文学研究科	教授	小野直子
副査：	広島大学大学院人間社会科学研究科	教授	長田浩彰

要 旨：

本論文は、19世紀末から第一次世界大戦前のドイツでみられたユダヤ体操運動を、帝政期ドイツの社会の中に位置づけることを意図している。ヤーンに由来するドイツ式体操はドイツ・ナショナリズムと結びつき、反ユダヤ主義的な心情と近かったが、このドイツ式体操取り入れたユダヤ人の運動に着目することで、帝政期ドイツのユダヤ人が置かれていた状況を浮かび上がらせている。注目すべき所論は次の通りである。

第1章「ユダヤ体操運動の成立と展開」では、ユダヤ体操運動の誕生とその発展について明らかにする。19世紀末にあらわれた人種的な反ユダヤ主義は、ユダヤ人の心身の劣等性を強調した。これに対抗するユダヤ人の中から、ユダヤ・ナショナリズムが生まれ、心身の劣等性を克服する手段としてユダヤ体操運動が創始され、ドイツ語圏、東欧、中東にネットワークを広げた。

第2章「ジェンダー化された反ユダヤ主義と「新しいユダヤ人」の創造」では、ユダヤ体操運動の背景にあったジェンダー観をめぐる問題を扱う。反ユダヤ主義者たちは、ユダヤ人が臆病で女性的であると軽蔑した。これは伝統的ユダヤ人男性の理想的ジェンダー像であり、体操運動によって生まれる新しいユダヤ人は、伝統的ジェンダー像からの脱却をめざした。ユダヤ・ナショナリズムはパレスチナへの移住を志向するシオニストと一線を画し、ディアスポラとして生きていこうとしたが、たくましいユダヤ人を理想とするという点で、シオニストと一致していた。

第3章「帝政期ベルリンにおけるユダヤ・ナショナリズム」では、ベルリンのユダヤ体操協会に焦点を当てる。この団体は同化リベラル派のユダヤ人からは不審の目で見られていたが、シオニズムを掲げない穏健派であり、ドイツ社会の中でユダヤ人が身体的に劣っていないことを示そうとしたのである。

第4章「ベルリンの急進派ユダヤ・ナショナリストと市民的男性性」では、20世紀初頭にパレスチナへの移住を敢行した急進派シオニストであるエリアス・アウエルバッハの自伝分析を通して、彼の内面ではドイツへの忠誠心とシオニストとしてのユダヤへの忠誠心が同居しており、この二つをつなぐのが近代ドイツ的男性性だったことを明らかにしている。

第5章「ユダヤ・ナショナリズムと退化論」では、ヨーロッパに広がっていた退化論とユダヤ・ナショナリストの関係について述べる。当時、近代社会の病理として退化が論じられ、とりわけ、ユダヤ人がその典型とされた。ユダヤ・ナショナリストたちはこの現状を統計的に確認したうえで、心身を鍛えることで、この状況から抜け出すことを主張し、ユダヤ体操運動を推し進めたのである。

以上の考察を通して、ユダヤ体操運動が、反ユダヤ主義者によるユダヤ人蔑視を克服し、ユダヤ人がドイツ人や他の民族と対等な、健全で、一人前の市民であることを示そうとする努力のあらわれであったことが明らかになる。史料の分析・解釈に不十分な点がみられるものの、ユダヤ体操運動という特殊な活動から、帝政期ドイツのユダヤ人文化の特質を明らかにし、新たなユダヤ人像を提言しており、本論文は、博士（文化史学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

2024年5月26日

論文題目： ヴィルヘルム期ドイツにおけるユダヤ体操運動（1898-1914年）
——身体ナショナリズム——

学位申請者： 河合 竜太

審査委員：

主査：	文学研究科	教授	服部 伸
副査：	文学研究科	教授	小野直子
副査：	広島大学大学院人間社会科学研究科	教授	長田浩彰

要旨：

2024年5月26日13時より、同志社大学今出川キャンパス徳照館第1共同利用室において、約3時間にわたって、学位申請者に対して口頭試問をおこなった。

学位申請者は、提出論文の内容と近代ドイツ社会史、身体史、ユダヤ史、ジェンダー史に関する質疑に的確に応答し、本論文の研究水準の高さと学術的価値を証明した。本論文の内容に関わる形で語学試験を行い、申請者がドイツ語および英語においても十分な学力を有することが確認された。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

Abstract of Doctoral Dissertation

論文題目： ヴィルヘルム期ドイツにおけるユダヤ体操運動（1898-1914年）
Title of Doctoral Dissertation ————身体のナショナリズム———

氏名： 河合 竜太
Name

要旨：
Abstract

本論は、19世紀末にドイツ帝政社会で始まるユダヤ体操運動を、1898年の創設から一つの区切りを迎える第一次世界大戦前までの時期を主たる対象として扱う歴史研究である。

従来のドイツ・ユダヤ史研究は、ドイツ・ユダヤ人の近代史を同化と解放によるドイツ社会への統合の過程として理解してきた。しかしながら、1970年代以降にはアメリカ合衆国の社会史や女性史研究が、また1990年以降にはドイツ国内のユダヤ史研究が、解放後のユダヤ人のアイデンティティの再構築に焦点を当て、その歴史像を問い直してきた。こうした潮流の下で、ドイツにおけるユダヤ・ナショナリズムの意義が再評価されつつある。ユダヤ・ナショナリズムの一翼を担ったユダヤ体操運動もまた、2000年頃から、研究者の高い関心を集めている。

ユダヤ体操運動に関する最も重要な成果は、ユダヤ体操連盟機関紙『ユダヤ体操新聞』（1900年創刊）と文書館史料を用いて、ドイツ帝政期のユダヤ体操運動を克明に描き出したダニエル・ヴィルトマンの研究である。しかし、ユダヤ体操運動をドイツ帝政社会やユダヤ社会の文脈に位置づける視点は弱い。上記のような課題を克服し、ユダヤ体操運動をドイツ社会やユダヤ社会の同時代的連関のなかで把握することを試みるために、本論はヴィルヘルム期という時代的特徴、ドイツのユダヤ社会、ジェンダー秩序という三つの観点を設定し、この運動をドイツ社会全体との連関を視野に入れて、複眼的に検討することを試みた。

本論は主な史料として、機関紙『ユダヤ体操新聞』のほか、ヨーゼフ・イエクティエリ・マツカビススポーツ文書館（ラマトガン）、シオニスト中央文書館（エルサレム）、ドイツ・ユダヤ史研究中央文書館（ハイデルベルク）所蔵の関連史料、および運動に関わった個人の手による自伝や回想録、同時代の新聞や雑誌、小冊子を使用した。

第1章は、ユダヤ体操運動の創設、目的、活動内容、規模、地域的広がりを明らかにし、その上で同時代のユダヤ・ナショナリズムの諸潮流のなかでのこの運動の特徴を検討する。ユダヤ体操運動は、1898年にベルリンで設立されたユダヤ体操協会バル・コホバ・ベルリンに起源をもち、1903年に創設されたユダヤ体操連盟の指導の下で推進された。ユダヤ体操連盟の会員数は限定的であったが、その活動範囲は中東欧からオスマン帝国にまで及んだ。この運動は、ドイツ・ナショナリズムと結びつく体操を、近代の同化と解放により喪失したユダヤ人の民族意識を強化し、心身の健康状態を向上させる手段として位置づけた。ユダヤ・ナショナリズムに基づくこの運動には、ドイツ社会とユダヤ社会が厳しい態度をとる。すでに多数の体操協会がドイツ国内で活動していたにも関わらず、ユダヤ体操協会が結成された背後には、ドイツ体操連盟の反ユダヤ主義が存在していた。

この運動は、民族の領土や国家の建設を推進するシオニズムからは距離を置き、他方で、体操というドイツ文化を奨励した点で、民族の言語やユダヤ人の歴史・文化に関わる活動を奨励するその他のナショナリズムとも異なっていた。本章は、この特異な運動が生まれた要因として、ユダヤ民族の身体が不健全であるという共通認識があったことを明らかにした。運動の支持者の間

では、退化という語が用いられていた。この運動は、退化という語で把握される民族の身体の病理的状态を前提として、体操によってその健全化を目指す、民族の身体を基盤とした特有のユダヤ・ナショナリズムであると論じた。

第2章は、「新しいユダヤ人」像の構築過程で、ユダヤ体操運動が果たした役割を検討する。19世紀末、シオニスト指導者マックス・ノルダウは、シオニズムを実現するために、古代の民族的英雄をモデルとした「筋骨たくましいユダヤ人」に生まれ変わることを同時代のユダヤ人に求めた。シオニズムを掲げないユダヤ体操運動が上記のユダヤ人像の構築に関与した背景には、「臆病なユダヤ人」という反ユダヤ主義的ステレオタイプがあった。まずヴィルヘルム期ドイツの反ユダヤ主義の舞台となる大学、協会、軍隊を取り上げ、それらの場における反ユダヤ主義言説が、ユダヤ人の市民的男性性を否定するものであったことを明らかにする。次に、『ユダヤ体操新聞』や関連刊行物を検討し、軍事的で身体的に強い「新しいユダヤ人」像が描かれ、それが反ユダヤ主義的ステレオタイプを打破するものとして理解されていたことを指摘する。そして、「新しいユダヤ人」像の構築における重要な場として、体操祭を分析する。体操祭が、体操家による演技と観客の応答を介して、過去の「筋骨たくましいユダヤ人」を提示する場となっていたことが明らかとなる。この過程の解明を通じて、著名なシオニスト指導者ではなく、体操祭で演技をする体操家が、「新しいユダヤ人」の創造で重要な役割を果たしていたことを強調した。最後に、ドイツ近代における「臆病」の概念を検討することで、「臆病なユダヤ人」像の意味の重層性を解明し、臆病を否定し、勇敢さを強調する上記の過程が、ユダヤ人解放に関わる問題であったことを示す。

帝政期ドイツのユダヤ・ナショナリズムは、通説的には、穏健路線（ディアスポラ主義）から急進路線（パレスチナ中心主義）への転換として描かれてきた。第3章では、穏健派のユダヤ体操協会バル・コホバ・ベルリンを取り上げ、ローカルな視点から通説的な理解を再検討している。この団体は、急進派を生んだ大学の学生団体と強い繋がりを持ったが、穏健的ディアスポラ主義を堅持した。女性や子どもの比重の大きさが急進化を留めた要因と考えられる。しかしながらこの団体の穏健的活動は、ベルリンのユダヤ社会の反発を招く。団体と地元のユダヤ社会の関係を照らし出す例となるのがスポーツグラウンドの建設に際した対立関係である。この団体の穏健的活動は、地元社会から、シオニズムの狙いを隠蔽した「偽装行為」として解釈された。このことが示すように、バル・コホバ・ベルリンの穏健的ディアスポラ主義は、急進派とは異なる点で、ベルリンのユダヤ社会に不安を与えていた。

イエフダ・ラインハルトの研究以来、ドイツ国家への忠誠かユダヤ民族への忠誠かという「ジレンマ」が、帝政期ドイツのユダヤ・ナショナリズムを考えるうえで重要な視点となってきた。この概念は、帝政期ドイツにおいてユダヤ・ナショナリズムがなぜ消極的であり、またなぜそれが大戦前に急進したかを説明すると考えられてきた。第4章は、1909年という異例の早い時期にパレスチナに移住した急進派の一人、エリアス・アウエルバッハという人物の前半生の軌跡を、主な史料として自伝を用いて再構成し、この人物のドイツ国家への忠誠とシオニスト的決断の「ジレンマ」を検討することで、急進派の出現を「ジレンマ」の解消の結果と理解してきた従来の見解を修正している。正統派ラビを父に持ち、幼少期を宗教的伝統の濃い環境で育ったこの人物は、ベルリンでユダヤ・ナショナリズムに出会い、シオニストに転向する。本章が示すことは、シオニストとしての急進的行動とドイツ国家への忠誠は矛盾していなかったことである。自伝の記述は、反ユダヤ主義を恐れず、ユダヤ民族に誇りを抱き、移住を決断するシオニスト的自己と、第一次世界大戦にドイツ軍の兵士として従軍する国家公民意識は、軍事的で身体的強さを強調する近代の市民的男性性によって媒介されていたことを示している。シオニストとしての男性性は、むしろ父親が体現した伝統的なユダヤの男性性との間に溝を生みだしていた。シオニストの男性性は、伝統的なユダヤ的なそれよりも、ドイツの市民的男性性と親和的であった。

第5章は、ユダヤ人の退化論を取り上げる。まず、世紀末ヨーロッパにおける退化論の広がり

を確認する。退化論は、社会ダーウィニズムの影響を受けた生物学的遺伝論であり、世紀末には国民や民族の衰退を問題とする悲観論として広がった。しかし、ラマルク主義（獲得形質の遺伝）に基づくその議論は、決定論ではなく、人為的介入を通じた、国民や民族の再生可能性という楽観論と表裏一体であった。退化論はさまざまな改革運動を出現させていた。ユダヤ体操運動もその一種であった。次に世紀転換期のユダヤ・ナショナリズムにおいて議論の対象となっていたユダヤ人の退化論を、世界シオニスト会議やシオニスト関連刊行物を手掛かりとして検討している。ここから明らかとなることは、ユダヤ人の退化論は、東欧のユダヤ人を対象とする議論から、ドイツを含む西欧のユダヤ人を対象とする議論へと移行していたことである。西欧のユダヤ人の退化論は、世紀末の近代批判と結びついてきたが、東欧のユダヤ人だけでなく、ドイツ・ユダヤ人の健全化が必要であるという認識を生んでいた。ユダヤ体操運動は、上記のような同時代のユダヤ人退化論と密接に結びついていた。この運動の支持者は、環境要因説に基づいて、シオニズムという解決策ではなく、体操によって民族の身体の健全化を主張していた。

以上の各論を通じて、結論部で、本論はユダヤ体操運動を、シオニズム路線とは異なるディアスポラ主義のナショナリズムであると規定した。ディアスポラ主義は、従来では多民族国家ハプスブルク君主国やロシア帝国の例で検討されてきたが、本論はそれが国民国家化を進めるドイツ帝国でも、民族の身体を基盤として生まれていたことを示した。ユダヤ体操運動は、非政治性に基づいて、ディアスポラ主義を追求したが、ドイツのユダヤ社会にユダヤ・ナショナリズムを浸透させ、ヴァイマル期におけるディアスポラ主義政党ユダヤ民族党の出現の下地を作り、またユダヤ人像を市民的男性性に基づいて再構築することで、ドイツ社会とユダヤ社会に変革を引き起こしたのである。